神の天命

999

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の天命

【Ｎコード】
Ｎ７１９２Ｋ

【作者名】
９９９

【あらすじ】
高校生が未知なる世界に立ち向かうストーリー

僕の名前は結城。普通の高校生活を送っていたそんなとき…あるニュースがながれた。
それは、とても悲惨なものだった。普段なら気にも留めないのだが、なぜかその時は違った。
ニュースの内容は殺人だった、だが普通のではない何かエスパーのようなものだった。
死体はぺしゃんこにつぶれていたしかし血は一滴も流れていない。
それは血がなくなっていた！！
　僕は気分が悪くなった、それでも学校に行って友達に会えば少しは気分が晴れると思い行くことにした。８時に学校に着いた、みんなもあのニュースの話をしていた。僕も加わり少しの間話を聞いていた。そして僕の友達の智がこんなことを言った「ヴァンパイアかな？」智はふだん発言することがないのでみんな注目した。そして僕も考えてみた、確かに一理あるあんなことは人間には出来ない。見渡すとみんな智が言ったことを考えてるようだった。すると「確かに」と言う声が聞こえてきた。みんな納得してきたときにチャイムが鳴り授業が始まった、クラスを見渡す限りみんな上の空だった、それはきっと僕も同じだろう。１２時チャイムが鳴りやっと解放された。ランチタイムはみんなであの話をしていた。真剣な奴もいればふざけたやつもいる、多半数はふざけてた。僕はもうちょっと真面目になってほしかった。これはそんなに面白い事じゃない次がないとも限らない。
　次の日、いつものようにテレビも付けるとまたあのニュースだった、それも昨日のではない新しい犯行だった！！人数は４４人！！僕はますます気分が悪くなってきた。だが果たしてこれほどのことを一人でできるのだろうか？次に監視カメラの映像が流れてきた、

その中には身長１７８ｃｍの男の映像があった見た目はほとんど人間だが爪が長く、角が生えているそれに黒くて鋭い尻尾も。そいつは窓ガラスを割ると背中から翼が出てきて空に消えた。僕は唖然と見ていたそれはヴァンパイアではなく悪魔だった！学校に行くとみんな真剣に考えていたもうふざけた奴はいない。その日は特に誰とも話さず一人で考えていた。家に着くと疲れていたせいか僕はすぐに寝てしまった。夜中トイレに行こうと目を覚ましたらなんと隣に天使がいた。天使はゆっくりとこう言った「あなたは選ばれました神に」僕はわけがわからず聞いていた。そしたら天使はこ打つ図毛ました「あなたは神と大魔王の子です正確にはその血が流れています。だから私たちに代わって悪魔の暴走を止めてください」結城「…よくわからないけどそうゆうことは君ら天使がやればいいじゃないか？それに僕に神と大魔王の血が流れてる？冗談はやめてくれ」天使「では、人間の歴史から言いましょう。遠い昔人間などと言う種族は存在しませんでした。悪魔と天使だけだったのです、ですがあるとき天使と悪魔が交わりましたその子供が人間なのです。さらに君は遠い昔の神と大魔王が交わって出いた子供の子孫なのです」結城「え！けど…」結城は混乱していた。結城「…けど僕ら人間は君ら天使や悪魔に全然似てないじゃないか。それにどうして悪魔の暴走を僕ら人間が止めなきゃいけないんだい？天使のほうが強いんじゃないのか？」天使「…１つずつ答えましょう、我々が交わったのは遠い昔の一度っきりなのです、だから時が過ぎた今人間は独自の進化をしました、それに我々には力はありません、天使には寿命はありませんが年をとるたびに力が失われてゆくのです、それに比べて悪魔はどんどん力を吸収してゆくのですさらに彼らは子を産むこともできます。今や天使は力を失い悪魔が力を得て暴走しているのです。」結城「事情は分かったけど僕にいったい何できるっていうんだい？」天使「確かに、君ら人間は何にも力はありません、でも君は神と大魔王の血が流れているのです。その眠った力を出せばとんでもない力を出せるでしょう。」結城「でどうやるの？」天使

「天界に連れて行きます」結城「え！！」
　僕は今とんでもないとこにいる。それは天界だ！！天使「気分はどうです？どこか痛いところはありますか？」結城「いや、特に」僕はとても興奮していた！天使「ここです」結城「え、何が？」言葉を言い終わったとき分かったここは神の部屋だと、ほかの場所とは違う何か神聖な空気が漂っている。天使「あれが7代目神です」結城「7代目？死なないんじゃないの？」天使「寿命はありませんが殺されたら死にます、先代たちは悪魔に殺されました」じゃあなんで交わったのか聞こうと思ったが今はやめといた。神「あなたが結城、血を継いだもの…、いま力を解放させましょう。」とたんに結城の周りが輝きだした。あたりを見渡すと天使たちが泣いていた。僕は少し不思議に思った。神「終わりました、何か感じますか？」結城「はい！」神「そうですか、では私は少し休むとしますか」神が部屋を出たとたん部屋の空気が変わった。結城「なんでさっき泣いてたの？」天使「…それは神の…」それ以上聞くのはやめといた、なぜならまた涙がこぼれていたからだ。結城「エーと…これから僕はどうすればいいの？？」天使「少し休んでください、部屋を用意します」結城「どうも」そして彼は部屋に案内された。
　コンコンという音で僕は目を覚ましたどうやら寝ていたようだ。ドアを開けるとそこには天使が立っていた。天使「神が呼んでいます」結城「今行く」僕は神の部屋に着いた。神「来ましたか、今からあなたにやることを伝えます」結城「はい」神「大魔王と話をつけ悪魔の暴走を止める、またはすべての悪魔の抹殺。私的には話をつけるほうが簡単でしょう、大魔王はあなたの先祖です悪いようにはしないでしょう。」結城「はい！」神「よろしい、これを持って行きなさい。オシリス槍です、これなら悪魔も倒せるでしょう。」結城「ありがとうございます」そうして僕はまた未知の世界に飛び立った。
　今僕は魔界にいる、真っ暗なところだ。辺りにはたくさんの悪魔がいる。たまに襲ってくる奴もいるがたいがいは弱い、きっと僕

が力を解放したせいだろう。どうやら城に着いたようだ。門番が話しかけてきた。門番「何奴」僕は容赦なく切りつけた。神は話し合いのほうがいいと言ったが僕は全滅させる気だった、新しい力を試したくてうずうずしていた。すぐさま警報が鳴り悪魔に取り囲まれた、僕は興奮してきた。すかさず切りつけた、悪魔の悲鳴とともに戦いが始まった。傷を負いながら僕は戦いに勝利した、だがこれで終わりではない城にはまだまだ沢山の悪魔がいるだろう。城を進むと悪魔の精鋭部隊にあった、さすがにこれには勝てなく大魔王の部屋に連れて行かれた。大魔王の部屋は邪悪な空気が漂っていた、僕の顔を見ると大魔王は縄をほどけど命令した。大魔王「なぜここにいる？」結城「神の命令だ！」大魔王「ふっん、ワシを殺しに来たか？うん？」結城「そうだ」大魔王「そうか、では殺すとしよう。それとも取引でもするか？え？」結城「取引？なんだ？」大魔王「神の命を差し出せ」僕は考えてみた神は僕にとって大事な人でもない。結城「いいだろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7192k/

神の天命

2010年10月22日12時17分発行